



埋文活用事業、略して 埋活！

山梨県埋蔵文化財センターでは、埋蔵文化財の活用、「埋活」をすすめています。どんな「埋活」があるのか、紹介します。

古代ヘタムワープできる「古墳ツアーリズム」。古墳の儀礼を体験！



埋活！史跡編

実はお気楽。史跡活用

「史跡の活用」と聞くと何を思い浮かべますか？思わず身構えそうになりませんか？

わたしたち埋蔵文化財センターでは、肩の力を抜いて、誰もが楽しめる史跡の利用を進めたいと考えています。



昔の鬼ごっこを取り入れた「甲府城で鬼ごっこ」。史跡甲府城跡に100人の小学生が集合！

この土器のなかにもひと回り小さい土器が入っています。どんな土器がでてくるのでしょうか



上コブケ遺跡は、山梨県山梨市北・南地内に広がる縄文時代と奈良・平安時代の集落遺跡です。調査区は幅4mしかありませんので、遺構などの発見が難しいと思われましたが、縄文時代中期の住居跡や土器など、たくさん発見されています。今回、発見された埋甕もその一つで、土器の中に土器が入っている、たいへんめずらしい出土状況がみられました。



2016年度の発掘はどんなところでどんなことがあきらかになるのでしょうか？各担当者に聞いてみました。



隼遺跡

隼遺跡は、山梨市牧丘町の国道140号沿いにある隼山の目もくらむような崖の斜面にあります。二つの窟（いわや）遺構で構成され、中世から近世に僧侶が修行した場所であると考えられています。窟の壁には、建物のほぞ穴が残っていることで、修行時に使っていた建屋などの施設の痕跡が地中から見つかるかもしれません。窟の中でどのような修行をしていたのか、明らかにしていきたいと思えます。



大黒窟

隼遺跡を構成する窟の一つ「大土窟」からの眺めです。天気が良ければ富士山が見えます。

楽しみながら学びます

県内に残された史跡の数々。この史跡はどれも山梨県の歴史を紐解く手がかりです。

とはいっても、難しくてわかりにくい説明ばかりでは、誰にも価値は伝わりません。そこで私たちは、誰もが、史跡で楽しみながら学べ、地域の身近な文化財を多くの人に知ってもらうことを目指しています。

この史跡の価値を後世に伝えることは、わたしたちの大切な役割です。

史跡ってなに？

ところで史跡って何でしょう？史跡とは遺跡の中でも特に歴史的、学術的に価値が高いものこと。わたしたち埋蔵文化財センターは、この史跡を地道に調査・研究し、その歴史的な事実を明らかにしようとしています。こうした研究成果をイベントの題材に取り上げることで、イベントに参加したみなさんに、最新研究の成果を紹介しています。

※山梨県の史跡（平成28年7月1日現在）：国指定史跡15件 県指定史跡29件

もちろん縄文土器、弥生土器の貸出も受け付けています。



縄文時代の深鉢形土器と注口土器



古墳時代の須恵器

縄文土器だけじゃない埋活！道具編

埋蔵文化財センターが、発掘・調査した時代は旧石器時代から近代までに及びます。縄文・弥生・古墳時代のイメージのある埋蔵文化財センターですが、その他にもさまざまな時代の遺物を収蔵・保管しています。

こうした遺物は、学校の授業での発見学習や体験学習、調査学習といったアクティブラーニングの教材として非常に有効なツールです。ここに紹介しているのは、貸出可能な遺物の一部です。

弥生時代の竪杵

土器の他に出土した木製品（レプリカ）の貸出もおこなっています。古代の生活用具から、当時の生活が想像できます。

※道具・遺物の貸出につきましては、山梨県埋蔵文化財センター史跡資料活用第一担当までお問合せください



鉾子塚古墳から出土した鏡のレプリカ



平安時代の坏



平安時代の灰釉陶器

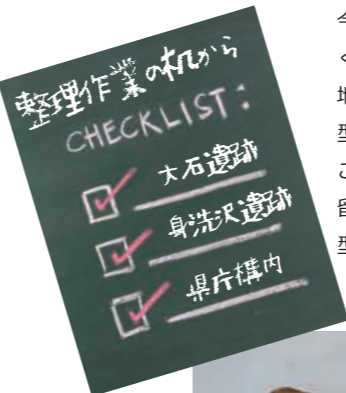


江戸時代のキセル

10世紀 塩川遺跡/寺所遺跡



羽釜って、ごはんがふっくらおいしそうに炊けそうなイメージですが、ちょうどこの頃から土器の羽釜が使われはじめます。鉄製のものを模倣したのが土器羽釜の始まりといわれています。



井戸内から発見された洪武通宝



今年度も同地点の立会調査を行い、井戸跡などが発見されています。今後も甲府駅南口では、調査が各所で行われますので甲府城下の人々のくらしぶりをご紹介します。たいと思えます。

甲府城下町遺跡は、現在の甲府駅の南側に広がる江戸時代の都市遺跡です。江戸時代の甲府城周辺には、たくさん武家屋敷や町屋が建てられていました。昨年度は、柳沢吉保時代の家老、柳沢権太夫の屋敷があった甲府駅南口のトイレ建設地点からは建物の地ならしをした跡と考えられる遺構などが発見されました。

甲府城下町遺跡

平安時代の大月地域、当時はまだ人口は多くはありませんが、桂川流域に集落が点在していました。今回調査した大石遺跡は、このような集落からは遠く離れた、従来遺跡の存在すら知られていなかった地点です。ここから出土した約1,200年前の甲斐型土器は、真っ赤な器で美しい暗文を持つ優品です。この時期甲斐型土器は、甲府盆地を中心として北都留地域や相模地域など広い地域で、大流行していました。この土器の出土から、甲斐型土器の流通と流行のようすを垣間見ることができるのです。



身洗沢遺跡の発掘調査では、羽口が出土しました。山梨県内では古墳時代に遡る資料は非常に稀少な事例です。羽口とは、金属等の精錬加工の際にふいごの末端に装着された土製の送風管です。古墳時代の羽口は、装着した革袋を圧縮させることで溶融した金属の塊に風を送っていました。この地域には、精錬技術をもった集団が住んでいたことが分かりました。

これは、県庁から出土した軒丸瓦の一部です。出土地点は県庁の西門付近で、甲府城の柳門があった場所に相当します。小さな破片ですが、表面には浅野家の家紋である「違い鷹の羽」が描かれています。浅野氏は1593年から1600年まで甲斐を所領とし、甲府城築城に尽力しました。

この瓦はの柳門に使われていた可能性があり、築城期の様子を知る手がかりの一つです。

